

定年後の 悠々自適は幻、 働き続ける高齢者



高

齢になっても働く人が増えている。60〜64歳は法律による雇用確保義務があるため働く人は80%超と高い。ところが65〜

69歳で働く人は2011年までは37%程度だったが、2024年は54・9%と2人に1人以上が働いている(総務省「労働力調査」)。その上の70〜74歳でも35・6%もいる。20年前なら定年を迎えたら悠々自適の生活という人も珍しくなかったが、その後、日本経済や企業の状況は一変し、業績の低迷や年功賃金の是正によって2000年以降、中高年社員の給与水準は抑制されてきた。老後の生活資金である退職金も減少し続け、加えて公的年金も「マクロ経済スライド」と呼ぶ減額措置が実施されている。

定年後研究所が実施した「60〜70歳代人生・仕事満足度調査」によると、仕事の目的は男性の60〜64歳は「お金」が80・4%、65〜69歳も78・2%、70〜74歳も68・4%と7割近い(複数回答)。「金銭的なゆとり」があるかについては男性の65〜69歳は「ゆとりある生活を送れている・日常の生活には困らない」が69・0%と7割近い。一方、「多少切り詰めなければいけない・何らかの援助を必要とする」人が31・0%。驚いたのは定年後もフルタイムで働いている人が大多数の60〜64歳では、「多少切り詰めなければいけない」が38・9%と上の世代よりも多く、「何らかの援助を必要とする」が5・5%で合計44・4%もいる。

背景には、定年後再雇用者の低い給与実態がある。中小企業の現状に詳しい社会保険労務士は「59歳時点の給与が50万円だった人が20万円程度の人も多い。収入が減るために『生活が苦しい』と嘆く人が多く、60歳から公的年金を繰り上げ受給している人も少なくない」と語る。65歳以上の人に比べて、今の中高年世代は今後益々生活が厳しくなりそうだ。